

「大学生における体罰に対する意識の違い」 —教員志望の学生と教員志望でない学生との比較—

浦川 健（生涯スポーツ学科 学校スポーツコース）
指導教員 谷川 尚己

キーワード：大学生，体罰，教員

1. 緒言

近年，学校現場において依然として「体罰問題」が起こり緊急の課題となっている。体罰は，学校教育法第 11 条で禁止されているにも関わらず，なくならないのが現状である。教員集団だけでなく教員を目指している学生や，保護者の体罰についての認識の甘さや誤解が考えられる。そこで，本研究では，大学生を対象に教員志望と教員志望でない学生で，体罰に対する意識の違いについて比較し，体罰根絶につながる方策の検討を目的とした。

2. 研究方法

本学の学生 312 名，0 大学の学生 125 名の合計 437 名。教員志望の学生 212 名，教員志望でない学生 225 名に対し，体罰について 14 項目のアンケート調査を行い，比較した。

3. 結果と考察

教員志望，教員志望でない学生に関わらず体罰に対してほとんどの学生がしてはいけないと考えていることが分かった。しかし，少数ながら体罰に対して，してもよいと考えている学生が教員志望，教員志望でない学生どちらにもいることから，まだまだ社会的に理解されていないと考えられる。

「体罰を受けた児童生徒は，体罰をどのように受け止めると思えますか」の質問に対して，教員志望の学生は「心の傷として残る」教員志望でない学生は「反発を感じる」と答えた者が最も多く，体罰に対するとらえ方の違いが分かった。児童生徒の気持ちになって考えていることのできない学生が多くいるものとする。

「教員が体罰を行う背景として，どのようなことが考えられるか」の質問に対して「教職員の指導力が不足している」が 1 番多い回答であった。生徒が言うことを聞かないのなら，それは教師の指導力不足によるものであり，常に学び続ける姿勢を忘れずに児童生徒の思いを理解し，接していくことが大切である。

4. まとめ

大学生における体罰に対する意識の違いを要約すると以下のとおりである。

1) 教員志望，教員志望でない学生に関わらずほとんどの学生が体罰はしてはいけない考えを持っていた。しかし，少数ながら体罰はしてもよいと考えている学生もいることから，まだまだ体罰に対して緩く考えている学生もおり社会的に理解されていないと考える。

2) 「体罰を受けた児童生徒は，体罰をどのように受け止めると思えますか」の結果では，教員志望の学生は「心の傷として残る」教員志望でない学生は「反発を感じる」と答えていた。児童生徒の気持ちになって考えているかいないかが原因と考えられる。

3) 「教員が体罰を行う背景として」の質問に対し「教職員の指導力が不足している」が 1 番多い回答であることから，体罰が行われる背景としては教職員自身に問題があるのでないかと考えている学生が多いことが分かった。

引用・参考文献
兄井 彰 (2014) 「将来教員を志望する大学生の体罰に関する意識調査」福岡教育大学紀要，第 63 号，第 5 分冊，95-101